■永富独嘯庵　　天才的医者。偏見を排し名著多数，華岡青洲の手術に示唆を与える一方，長府藩製糖業も創始したが，早世。
ながとみどくしょうあん
享保大飢饉・1732＝　　長門国豊浦郡宇部村で，庄屋勝原治左衛門翠翁の三男に生まれる。名は鳳介，字は朝陽

幼時より聰慧で，

・・・・・・1741＝ 9歳：

梅岩没・・・1744＝12歳：_才能を見込まれて，赤間関(下関)の医者永富友庵の養子になり，萩の藩医井上元昌の学僕になって，金・元の李東垣や朱丹溪の医(後世方)を学び，かたわら，萩藩主毛利宗広に招聘されていた儒学者荻生徂徠の高弟山県周南の塾に通って頭角を現し，周南に鍾愛され，その推挙で，
徳川吉宗隠居1745＝13歳：
義経千本桜・1747＝15歳：_藩主に従って江戸に出，幕府の奥医師に師事するとともに，徂徠学派の服部南郭・太宰春台に学ぶうち，
忠臣蔵・・・1748＝16歳：_「名利に迷う流行医は生命に益なし」と，医術を嫌うようになって，赤間に帰郷。悶々とするうち，たまたま友人から，京都に，古医方を唱えて，生命にも益のある名医山脇東洋がいることを聞くや，
・・・・・・1750＝18歳：*京都に上って，東洋の塾に入門。その言に納得するや，研究の鬼になり，東洋をして「自分には御し難い」と嘆息させる一方，逸材としての名声高まり，諸侯から招聘の声がかかるも，東洋に止められ，
徳川吉宗没・1751＝19歳：
・・・・・・1752＝20歳：_東洋に命じられて，東洋の甥の東門と共に，越前武生の奥村良筑を訪ね，良筑の発明した吐方治療法を学ぶとともに，良筑の実証医学の神髄も身につけて，京都に戻って，東洋に伝えた上，赤間関に帰郷し，吐方による医業を始めるが，3年で，その困難を知り，飲博亡頼の交を一切たち，剃髪して，一から出直して，また3年，当代の医者が，古医方を分かっていないことの重大さを認識するも，病にかかり，
山脇東洋解剖1754＝22歳：そのため，この年，山脇東洋が行った日本初の人体解剖には立ち会っていない。
良筑は著作をしなかったので，門人だけに伝えられ，それを知った東洋によって入門したわけであるが，20の若者と70近い老大家との肝胆相照らす出会いは，実に，わが国漢方医学大成の鍵になったのである。
大弐政治批判1759＝27歳：
大岡忠光没・1760＝28歳：
・・・・・・1761＝29歳：*諸国漫遊に出て，長崎に至り，吉雄耕牛に就いて蘭学を学んで，西洋医学にも開眼するとともに，唐人から製糖技術を伝授されていた長谷川慶右衛門に学んで，砂糖黍の苗を入手，
・・・・・・1762＝30歳：京都を経て*赤間関に帰ると，兄弟らが栽培を始め，白糖の製造にも成功し，藩領一帯に普及させることになる。自らは，大坂で開業するとともに，「漫遊雑記」「吐方考」「嚢語」「葆光秘録」「黴瘡口訣」などの名著を相次いで出版。「漫遊雑記」中に記した乳がん手術の可能性が，のち華岡青洲に示唆を与えた話は有名。
_偏見を排し，東洋流の古方を中心としつつ，他流の採るべきところは採り，蘭方にも深い理解を示したが，生来の蒲柳の質に無理がたたって，結核を病み，
忠臣蔵大当り1766＝34歳：_没した。
門人には儒者亀井南冥や蘭方医小石元俊らがいる。

「人づくり風土記(山口)」，平凡社百科事典。寺師睦宗「内藤希哲・永富独嘯庵・山田椿庭～その人となりと業績～」により大幅追補，